―忘れられた内戦―ビルマ・カレン民族の五〇年

ビルマの現状が報道されるとき、それは現在の軍事政権に対し、非暴力の民主化運動を続けるアウンサンスーチー氏が話題の中心で、密林地帯でも抵抗運動を続けている先住民族の存在に触れられることはあまりない。

多民族国家ビルマでは人口の約七割をビルマ族が占め、カチン・カレン・チン・モン・シャン族などの諸先住民族は、周辺国に接した辺境地帯に住んでいる。汎ビルマ主義を押し進めようとする歴代のビルマ軍事政権に対し、これらの民族集団は、一九四〇年代後末から抵抗運動を続けてきた。しかし、軍政府の圧倒的な物量と政治的駆け引きによって、ほとんどの抵抗運動は消え去っていった。

しかし、カレン民族だけは、民族解放を目指し、現在も武器を持って軍政府に抵抗闘争を続けている。だが、国際社会の安全を脅かすビルマから密輸出されるヘロインが問題になっても、カレンの存在は大きく取り上げられることはない。

第二次大戦後の植民地解放・東西冷戦終結を経た今でも、ビルマ軍政府とカレンとの紛争にどの国も介入もしてこなかった。大国の利害が絡まない地域だから。第二次大戦以来戦火が途絶えたことのない、世界で最も古い地域紛争に国際社会の目は行き届かない。

そんな現状であっても、タイとの国境地帯で自治権闘争を続けるビルマ・カレン人の「忘れられた戦争」は続く。彼らは、カレン民族同盟（ＫＮＵ）の旗のもとに団結し、孤立無援で自分たちの文化と伝統を守ろうとしている。その紛争の歴史は、今年一月三十一日でいよいよ五〇年目を迎える。

＜写真キャプション＞

・山向こうに陣取ったビルマ軍の動向に目を光らせるカレン兵。
・ビルマ軍に襲撃された難民キャンプ。男の子がひとり、失った長靴を捜し回っていた。
・夜明け直後、目がさめやらぬ最前線のカレン兵。
・伝統舞踊「ドーンダンス」の激しい動き。
・大多数のカレン人は仏教を信仰している。
・ビルマ軍の攻撃から身を守るため、地雷も使わざるを得ない。
・カレンの未婚女性の純潔を表す伝統的な白衣「シモア」
・ビルマ軍の占領区を移動中、支援者の村人宅で休憩をとるカレン兵。
・カレン民族の存亡をかけ、傷ついた身体でも武器を持ち続ける。
・タイ国境のサルウィン河を越えるとそこはカレン州。
・かつて日本軍に、今はビルマ軍に迫害を受ける老兵。
・内戦の終わるのを夢見て、ロウソクの灯りのもと勉強に精を出す難民キャンプの男の子。
・精霊を信仰するカレン人の結婚式。親戚の男に囲まれた花嫁は初対面の花婿を待つ。